



「自然の力で健康を取り戻す」方法を伝える仕事

第4回 ローチョコとオーガニック・コーヒーが出会った瞬間

2015年5月18日

デトックスセミナーは、私自身が長年アレルギーに悩み克服した体験を基に行なっていました。様々な自然療法や食事療法をニューヨークや日本の学校で勉強し、自分の体で様々な改善方法を試し、多くの方にも実際に試していただいたその結果から得た知識を皆さんにお伝えしていました。

当時、私のこの活動を見ていた、ホメオパシーの学校の学長が「福島で子供や動物を助けている人がいる。そういう行動している人とも繋がりながら活動するといい」と、先生の友人である寄田勝彦（よした・かつひこ）さんを紹介してくれました。

ホースセラピーと自然療法との共通点

その人は、「他力サンガ」発起人である寄田勝彦氏でした。家に帰れなくなった子供や、親に頼れなくなってしまった子供を助けて預かったり、現代社会で生きにくさを感じる人に対して、自分の牧場でホースセラピーを施す活動をする人でした。国内にも海外にもセラピー牧場をたくさん運営しています。

裕福な家庭に生まれた彼自身が、幼い時に突然、両親を頼ることができなくなり、孤児のような境遇におかれた経験から生まれた活動です。傷つき、自殺未遂を繰り返すほど自暴自棄になっていた彼を救ってくれたのが馬との出会いだったそうです。馬との触れ合いが彼を立ち直らせてくれた経験そのものから、セラピーのメソッドが構築されました。

ホースセラピーは、歩行困難などの身体面のセラピーとして海外では知られていますが、寄田氏はそれだけでなく精神面のセラピーを馬によって行っています。彼の凄まじいばかりの生い立ちと活動内容を聞いて、私は、学ばせてもらいながらその活動を手伝いたいと思いました。私が、自然療法や食の学びによって「健康や本当の幸せを得るために大事なこと」だと感じてきたことと、ホースセラピーには下記のような大きな共通点がありました。

- 人間が小手先でコントロールしようとすることの傲慢さと浅はかさに気付くこと
- 大自然の力に謙虚に頼り、その本質的な命が循環する流れに添うこと
- 弱さの側に立つこと
- 他人や環境などの他の命を尊ぶことが同時に、自分の命を尊ぶことになる

寄田さんとは、進もうと考える方向が非常に近いため、一緒に様々な活動を助け合って進めていこうということになりました。実際は、半分沈んでいた舟に乗っていた私を助けてくれた形になりました。

「ローチョコ村の森とコーヒー」

寄田さんが行っていた活動の一つに、タイの山岳民族の方達とのコラボで作っている自然農法のコーヒーの栽培のプロジェクトがありました。コーヒーが苦手だった私が思わず何杯も飲んでしまったほど素晴らしくおいしいコーヒーで、しかもこのコーヒーができたストーリーに私は一気に引き込まれました。

彼の友人の大学教授である小松光一（こまつ・こういち）先生が、30年前にタイの山の中にラフ族という山岳民族が暮らしていることを知りました。彼らは元政治難民で、戦いを逃れてタイに越境してきた人達でした。タイ国籍を持っていないため、仕事ができず学校にも行けず、仕方なく売春や麻薬栽培をして生計をたて

るしかなかったそうです。小松先生が彼らに寄り添って過ごす中で、彼らが学校に行きたがっていることを知り、近隣の学校に掛け合い入学させてもらい、その後、彼ら専用の小さな学校を建てました。

この部族の首長は「焼き畑などすることなく、この山の緑を後世まで残せ」という遺言を残していました。近隣の山は目先のお金のために焼かれ、禿げ山だらけになっていましたが、彼らは生活に困りながらも首長の言葉を守っていました。



■自然農法で栽培したタイのコーヒー

首長の息子が飛行機代を貯め、「勉強したい」と小松先生を頼って日本に留学に来ました。農業社会学が専門である小松先生のもとで学び、農家に住み込んで学んだあと、タイに帰りました。その後、息子は山で自然農法によるコーヒーを村の皆と作り始めました。山を伐採せず、動物が共存する森の中で、農薬を使わず、手作業で木々の間にコーヒーを育てる方法です。5年かかってようやく素晴らしいコーヒーができ上がったところでした。

私はこのコーヒーの商品化と輸入の仕事をさせていただくことになりました。ビジネスをストップせざるをえなくなっていたローチョコレートと、オーガニックのコーヒーは、お店で一緒に提供できるアイテムであるし、どちらもオーガニックでフェアトレードの嗜好品なのでコンセプトが似ており、興味を持ってくださるお客様の層も似ていました。またチョコとコーヒーを組み合わせた商品開発もできそうでした。

寄田さんが、「ローチョコ村のコーヒーの日本への輸入・商品化と、チョコレートと組み合わせた展開を行なうプロジェクト」のスタートを声掛けをすると、賛同者や出資者が集まりました。小松光一先生、ブランディング・デザイナー、オーガニックコーヒーの工場を持つ卸販売会社の社長、スローライフを提案する自然派カフェのオーナーなどです。皆で自費で現地の山に何度も行き、山小屋で値決めなどの話し合いをしました。そして「ローチョコ村の森とコーヒー」という焙煎コーヒー豆が商品化されました。

この活動の間に、先程の賛同者の一人であるカフェのオーナーが、チョコレートの製造場所として、カフェのキッチンを定休日に貸して下さり、東日本大震災でストップしていたローチョコの製造も再スタートできました。ローチョコレートとコーヒーは、オーガニックのレストランやストアへ卸販売もスタートさせました。ローチョコレートとコーヒーは、徐々に人気が高まってヘルシー志向の方達の間で知られるようになりました。特に下記のローチョコレート作りの理念に共感して下さった方達が話題にして下さいました。



■焙煎コーヒー豆「ローチョコ村の森とコーヒー」

- 白砂糖や添加物なしで無農薬
- 100%ナチュラル・オーガニック

- 市販のものや、今までの健康志向のお菓子よりも、味がリッチでおいしいものであること
- 非加熱なので熱に弱い栄養素が生きていること
- 6大アレルギー不使用（卵・牛乳・大豆・小麦・米・そば不使用）

朝日新聞など多くのメディアの記事になり、売り上げも伸びていきました。記事を手に握って来店される方も増えました。

商品はスローライフを提案するカフェや、ベジタリアンレストランに卸させていただき始めました。売り上げが1カ月で100箱になることもあり少しずつ伸びてきましたが、作り手は私一人しかいませんでした。まだ人件費が出るほどの利益はなかったため、ローチョコと一緒に作ったり、コーヒーの通販作業を手伝っていただく「無給インターン」という制度をひねり出し、3カ月ごとに希望者をブログで募りました。

「ローチョコのおいしさのヒミツを知りたい」と最初は一人、次にまた一人、その次は5名の方が、次は10名の方が、その次は20名の方が集まってくださいました。インターンの方々に協力してもらいながら、新商品の開発もしました。商品の形やパッケージのアイデアを出し合っ下さり、ローチョコとローチョコ村のコーヒーを掛け合わせた「RAWエナジーバー」という今まで誰も作らなかったヒット商品もできました。山登り、ランニング、トレーニング、仕事などをしていて小腹がすいた時に、速やかに栄養とエネルギーチャージができるチョコレートバー・スナックです。

バレンタインデーの時は2週間で、通販だけでも800件以上のオーダーをいただき、何日も徹夜で作業しました。インターンの方達も会社帰りにスーツのまま来て下さり朝まで作業していただきました。私のビジネスは、彼らのおかげで、何とか進めることができたのです。

チョコの人気と平行して、この頃、デトックスセミナーでお分けしていた入浴剤「CLAYD」を使った方からの喜びの感想をメールで毎日のようにいただくようになっていました。「リピートして使いたいから、日本で正式発売してほしい」という声も大きくなっていました。

知り合いから「中小企業庁が、創業補助金の申請の募集をしている」という話を聞きました。入浴剤「CLAYD」をビジネス化するには大きなチャンスです。でもこれには、相当な準備作業が発生します。

- 化粧品製造販売業者としての許可を取得すること。
- 展示会へ出展すること。
- 商品パッケージ製作。
- 商標登録や輸入業者登録など…。

一人ではとても無理な作業量です。

いつものようにインターンの方々に相談すると、何人かの方から「本格的に手伝ってくれる」という力強い答えをもらいました。もちろんビジネスが成り立つまでは全員無給です。この商品が必ず世の中のためになるという確信と希望と一緒に持って下さった方々でした。

ビジネスを大きくしていく時に気付くことがありました。どんなにがんばっても一人でできることは限られているということです。昔の私は一人でなんでもこなせることが、自立することだと傲慢にも思っていました。できなくて悩んでいました。しかしこれは大きな間違いでした。仕事量、守備範囲、スピード。自分の限界をまず認めることです。この限界を超えるには、専門知識や自分に無い能力を持った人達に頼るしかありません。



■「自分の限界を認め、覚悟を決めて人に頼ることが、本当の意味での自立すること」

ビジネスを大きくしていくということは、他人の人生をその活動の渦に巻き込んでいくということです。私の場合は、その人の人生にとって価値のある、幸せだと感じられる仕事をしてもらいながらという事を必須条件にしています。将来必ずお返しをする！と心の底で覚悟を決めて助力をお願いをするのです。色々と壁にぶち当たって失敗しながら、なんとか起業を進めていく上で、次のことが段々とわかってきました。

自分の限界を認め、覚悟を決めて人に頼ることが、本当の意味での自立するということである。

Copyright © 2017 Nikkei Business Publications, Inc. All Rights Reserved.

日経BP社

このページに掲載されている記事・写真・図表などの無断転載を禁じます。

掲載している情報は、記事執筆時点のものです。